

総合科学の基礎C  
哲学思想の基礎

2018/06/15  
理解し考える力③

### 哲学用語が必要なわけ

- 「哲学用語だと文章で訳すわけにもいかない」と言っていたが、その理由が分からない。
  - 日常生活でも、「人や車の交通を整理するために緑と赤のランプで進めと止まれを示す機械」などと言いつけるわけにはいかないでしょう。
  - ある概念を把握したら、その概念を示す適切な名前を付ける必要があります。
  - 名前は、複雑な概念を代理representationし、簡便な操作(思考)を可能にします。
  - 学問とは、ある意味では「用語の体系」です。

### 哲学用語が難しいわけ

- 「訳した人が、あえて難しい言葉を使っている」
- 「難解な用語の方が高尚な感じがするから」
- 「あえて難解な語を用いて学があることを見せつけるため」
  - 訳した人たちは、言語の意味を理解したうえで、その意味を表現するための漢字を組み合わせで作りました。
  - そうした用語の大部分が、日常生活に浸透していないから、難解に感じるということでしょう。

### 原語で読むことが必要

- 「翻訳語では十分に意味が理解できないので、原語で読むことが必要だ」
- 「カントの日本語訳より英訳の方がわかりやすかった。英語で読むべきだ」
  - 本当に実行してください。

### 前回のまとめ

- カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」
  - 感覚から得た情報を、悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに理性で統合する。
  - 感覚(個別的なもの)→概念による理解(それが何だか分かる)→法則による理解(どうしてそうなっているのか分かる)
- 付言すると、
  - 枠組みとしては、アリストテレス以来あまり変わっていない。
  - 大きな転換点は、カントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論している。  
→ここから、前回のプリントに

### アリストテレスの「神」

- 世界の運動の第一原因としての神。
  - 「神は永遠にして最高善なる生者であり、したがって連続的で永遠的な生命と永劫が神に属する」(『形而上学』第12巻第7章、井隆訳の岩波文庫版、下p.154)。
- ヨーロッパ中世の哲学で取りあげられる。  
能動知性は「神の知性」と考えられる。